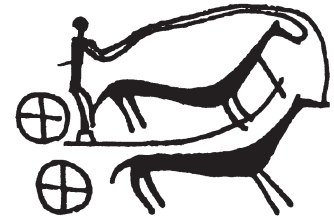


センターニュース

Hokkaido University
Center for Research and Development in Higher Education

北海道大学高等教育機能開発総合センター
Newsletter No.58



特集：キャリア教育

北海道大学におけるインターンシップ

(3 ページ)

特別講義「大学と社会」と1年生のキャリア形成

(5 ページ)

<成績評価・GPA をめぐって>

数学における成績評価

(9 ページ)

(詳しい目次は裏表紙にあります)

巻頭言 FOREWORD

いま、なぜキャリア教育か？

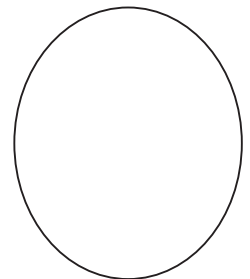
キャリアセンター長 徳田 昌生

大学の使命のひとつは人材育成であります。優秀で意欲的な学生を数多く育成し世の中に送り込むことは極めて重要であり、社会から強く求められていることでもあります。一方、2007年度からの大学全入時代を迎え、北海道大学は高校生を引きつける魅力溢れた大学に変わって行かなければなりません。幸い、本学には学ぶための素晴らしいキャンパスと環境がありますので、今後は社会で存分に活躍できる人材を育成するシステムをうまく作りあげて行くことが必要となります。

そのためには、新入生に対して、社会の現状や

ニーズを正しく伝え、本学が目指す理念の「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」及び「実学の重視」を実現することの大切さや卒業後の自己をイメージして

学ぶことの重要性などを明確に示し、それらの目標に近づくことを促す必要があります。キャリアセンターと生涯学習計画研究部では「キャリア教育に関する研究会」の議論を踏まえ、2005年度か



ら1年生を対象とするキャリア教育科目を新たに開講することにいたしました。

人材育成のためには、社会ではどのような人材が求められているかを知る必要があります。最近発表された日本経団連あるいは経済同友会のアンケート調査結果によれば、採用選考時に重視する項目としてコミュニケーション能力、チャレンジ精神、熱意・意欲、積極性、行動力及び論理的思考力などがあげられています。国家公務員I種の採用担当者も総合的な「人間性」や「人間力」などが採用時の決め手になると述べています。

社会では本学の学生をどのように見ているか、ひとつのアンケート結果があります。週刊ダイヤモンド社で毎年行われている特集「役に立つ大学ランキング」の2004年度版では、北海道大学・理系は全国でなんと26位、文系では46位と、非常に低く評価されています。このアンケートは「採用したい学生に出会う確率が高い」、「教育に熱心である」及び「就職支援に熱心である」の3項目について約500社の企業の人事部長が4段階で評価した結果をまとめたものであります。「教育に熱心である」の項目だけで見ると北大・理系は全国で第5位にランクされていますので、上記の結果は「北大には採用したいと思う学生はあまり多くない」ということを物語っているように感じられます。残念ですが、社会のひとつの見方として謙虚に受け止めなければなりません。

そこで、2005年4月から新入生を対象としたキャリア教育科目「キャリアデザイン」を新たに開講し、「学ぶこと」と同時に「働くこと」の意義を十分考えさせ、入学後の早期から職業意識を持つことによって自らの将来におけるキャリアを考えるきっかけにしたいと考えています。亀野淳助教授(生涯学習計画研究部)、野口徹教授(工学研究科)と小職の3人が担当して行う予定です。

具体的には、まず3回程度の概論を行い、次に国際公務員、ジャーナリスト、経済界、技術者及びベンチャー関連などの分野において活躍中の5名の学外講師を招いてお話しいただき、学生に高いレベルで働くことの面白さや人間性向上の重要

性、さらには社会のニーズなどを伝えたいと考えています。講師には経済同友会の北城恪太郎代表幹事などがすでに決まっています。その後10名程度の小グループに分け、学外講師の仕事を自分達の将来の職業と仮定して4回にわたってロールプレイング的なグループディスカッションを行うことを考えています。仕事の社会的意義とやりがい及びその職業に就くために必要な学びと方法などについて調査と討論を行い、各グループの意見をまとめて結果を発表させる予定です。グループディスカッションでは、学部や出身地の異なる学生同士が討論を行うので各自が幅広い人間性を育むきっかけとなり、また、討論と発表によって「積極性」、「フロンティア精神」及び「コミュニケーション能力」などを身につけることができると考えています。各自の成長の度合いは、講義初期とグループディスカッション終了後に行う2回の自己分析(人間力を見極めるEQテスト)で確認する予定です。最後に、各自にその時点でのキャリアデザインについてレポートを提出させて、講義は終了いたします。

今回新たに開設する「キャリアデザイン」の講義は入学直後に行いますが、全学教育科目としてすでに開講されているキャリア教育に関連する科目の「インターンシップ」(1~6年次,1学期)、「大学と社会」(特別講義,1年次,2学期)、「自らのキャリアについて考えよう」(一般教育演習,1年次,2学期)及び「北海道大学の人と学問」(特別講義,1年次,1学期)などと連携することによって、より充実したキャリア教育を推進できるものと考えています。

以上述べたように、高い志をもつ優秀な人材を育成するためのシステムのひとつとして、新入生に対して新規にキャリア教育科目「キャリアデザイン」を設定することにいたしました。ここでは就職のためのテクニックではなく、社会で働くことの意義や人間性陶冶の重要性などを教え、本学の四つの理念を十分に意識して学んで行くことを奨励したいと考えています。

北海道大学におけるインターンシップ

高等教育機能開発総合センター助教授 亀野 淳

インターンシップとは

生涯学習計画研究部では、これまで北海道大学におけるインターンシップの推進に中心的な役割を果たしてきました。ここでは、これまでの取組状況と今後の課題・方向性についてまとめたいと思います。

我が国においては、インターンシップは「学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行うこと」と定義されています。大学のインターンシップについては、1997年の文部省、通商産業省、労働省（いずれも当時）による3省合意をもとに、導入が進んでいます。

北海道においても、インターンシップに対する関心が高まり、1998年に産学官からなる「北海道地域インターンシップ導入促進連絡会議」が設立され、さらに、道内大学等が主体となった「北海道地域インターンシップ推進協議会」が設立されました。現在、同協議会には道内の18大学・短大・高専が加盟しており、同時に産業界、行政機関とも連携をとりながらインターンシップの普及・拡大に努めています。

2本建てのインターンシップを

北海道大学においても、本学におけるインターンシップのあり方を検討するため、1998年、評議会のもとに、福迫工学研究科長（当時）を座長とするワーキンググループが設置され、2001年1月に報告がなされました。同時に、上記の「北海道地域インターンシップ導入促進連絡会議」が実施するインターンシップ事業に参画してきました。

また、上記ワーキンググループの報告を具体化するために、2002年には学生委員会に「インターンシップ専門委員会」（委員長：野口徹工学研究科教授）が設置され、

①インターンシップを正課として位置づけ、その推進に努めるべきである

②各学部・学科、研究科・専攻が主体となり各専門に応じたイ

ンターンシップと全学教育科目として実施するインターンシップの2本建てで実施すべきである

との報告がなされました。

つまり、インターンシップを北海道大学の教育カリキュラムの中に位置づけるとともに、学部2年生くらいで2週間程度の体験型のインターンシップを行い、さらに、学部や研究科でその専門に応じたより高度なインターンシップを実施するという2本建てで行うということが方針として示されました。

正課としてのインターンシップ

北海道大学では、こうした方針に基づき、これまでは「課外活動」という位置づけで実施してきたインターンシップを2004年度より全学教育において正課として位置づけて実施しています（「全学インターンシップ」と呼んでいます）。また、各学部・研究科においても、各専門に応じたインターンシップを正課として導入するところが増えていきます。さらには、2004年4月に「キャリアセンター」が設置され、学生に対する就職支援とともに、インターンシップをキャリア教育の重要な柱の一つとして位置づけ、学生と企業とのマッチングや企業開拓等を行っています。

このような取組の結果、2004年度には、表1のようにインターンシップの参加者が大幅に増加し、288人となっています。これは昨年度の155人の

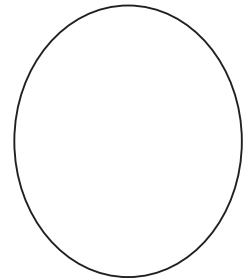


表1 2008年度インターンシップ 参加学生数 (キャリアセンター調べ)

学部

| 学部 | 学科 | 学生数 | 大学側の関与度合い ² | 実習期間 (週間) |
|-----------------|---------|-----|------------------------|-----------|
| 全学 ¹ | | 68 | 2,4 | 1～4 |
| 法 | 法学課程 | 4 | 1 | 1～2 |
| 工 | 材料工学科 | 2 | 1 | 1～2 |
| | 情報工学科 | 8 | 1 | 4 |
| | 土木工学科 | 17 | 4 | 1～2 |
| | システム工学科 | 2 | 3,4 | 2 |
| | 建築都市学科 | 18 | 3 | 1～2 |
| | 資源開発工学科 | 8 | 3 | 1 |
| | 原子学科 | 1 | 4 | 2 |
| 農 | 森林科学科 | 36 | 2 | 1～2 |
| | 農業工学科 | 35 | 2 | 1～2 |
| 獣医 | 獣医学科 | 20 | 1 | 1～2 |
| 小計 | | 219 | | |

大学院

| 研究科 | 専攻 | 学生数 | 大学側の関与度合い ² | 実習期間 (週間) |
|-----------------|-----------|-----|------------------------|-----------|
| 全学 ¹ | | 21 | 2,4 | 1～4 |
| 法学 | 法学政治学 | 3 | 2 | 1～2 |
| 工学 | 機械科学 | 6 | 4 | 1週間～6ヶ月 |
| | 都市環境工学 | 2 | 4 | 2 |
| | 社会基盤工学 | 6 | 4 | 1～8 |
| | 量子エネルギー工学 | 1 | 4 | 8 |
| 薬学 | 医療薬学 | 2 | 1 | 6ヶ月～1年 |
| 国際広報メディア | 国際広報メディア | 11 | 2 | 1～2 |
| 情報科学 | システム情報科学 | 6 | 1,4 | 2～8 |
| | 生命人間情報科学 | 1 | 4 | 2 |
| | 複合情報学 | 10 | 1 | 8 |
| 小計 | | 69 | | |
| 合計 | | 288 | | |

(注) 1. 「全学」はキャリアセンター、高等教育機能開発総合センターが中心となり実施した全学インターンシップ

2. 「大学側の関与度合い」は以下のとおり。

- 1: インターンシップ教育体系の下で必修科目として実施している。
- 2: インターンシップ教育体系の下で選択科目として実施している。
- 3: 学生からのインターンシップ報告に基づき単位認定している。
- 4: 大学としての単位認定はしていないが実態は把握している。

約2倍となっています。

インターンシップの拡充を目指して

しかしながら、課題もいくつかあります。

まず、すべての学部・研究科においてインターンシップが導入されているわけではありません。全学インターンシップにはほぼすべての学部・研究科の学生が参加しており、学生の関心も学部・研究科を問わず高くなってきています。しかしながら、インターンシップを導入していない学部・研究科の学生は全学インターンシップに参加するしか方法がありません。また、全学インターンシップでは専門に応じた高度なインターンシップの実施には限界があります。もちろん、インターンシップの導入は学部・研究科の判断によりますが、より多くの学生が参加できるよう前向きに考えていただきたいと思っています。

次に、表1のとおり、インターンシップの参加者は大幅に増加していますが、受入れ企業数が限られるため、参加を希望しながら参加できない学生も数多くいます。道内・道外企業を問わず、受

入れ企業の開拓に努め、受入れ企業を増加させる必要があります。この点についてもキャリアセンターと高等教育機能開発総合センター、各学部・研究科の連携も重要な課題となっています。

さらに、より多様な、より長期間のインターンシップや海外インターンシップなどより質の高いインターンシップの実施の必要性も高まっています。例えば、1～2ヶ月程度企業で特定のテーマについて提案を行うなどより高度な内容のインターンシップも徐々に広がってきています。また、工学研究科では毎年数名の大学院生が海外インターンシップに参加しています。こうしたインターンシップは特に大学院生にとっては有意義なものになると思われます。

いずれにしても、このような課題を解決しながら、全学教育や各学部・研究科の教学上の理念に基づきインターンシップを企画・実施するとともに、その運営に当たっては、キャリアセンターとも連携をしながら進めていくことが重要であると考えます。

特別講義「大学と社会」と1年生のキャリア形成

高等教育機能開発総合センター教授 町井 輝久

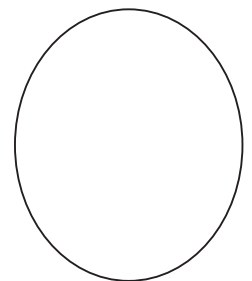
特別講義「大学と社会」について

全学教育特別講義「大学と社会」は、1998年度から当時の高等教育機能開発総合センター長、中村睦男現総長の発案で始まったものである。実社会で活躍する卒業生を講師に招き、自らの職業や専門分野、仕事の面白さややりがい、人生経験などとともに、大学時代にどんなことを身につければよいかについても語ってもらっている。

同様の企画は九州大学などで行われているが、卒業生を講師としているところが本学の特徴である。先輩-後輩ということ、実社会の話でも学生にとってより身近なものとして受けとめられると

いう利点とともに、講師の方も後輩と言うことで遠慮のいらぬ率直な表現で学生達を叱咤激励してくれる。例えば「北海道大学などというブランドは就職試験の時に何の役にも立たない。自分が何をできるかが問われている」などという、受験の時から「良い大学イコール良い就職」という考え方の安易さを、ずばつと指摘してくれるのも先輩ならではの。

毎回総長をはじめ、各部局の先生方に講師にふさわしい方を推薦いただき、各年度10～11名の



卒業生による講義を後期金曜日の3講時に開講している。講師の選定に当たっては、企業のトップだけでなく、就職後5年ぐらいの仕事の面白さと難しさを感じるようになった時期の卒業生まで、なるべく幅広い年代の方で、また職業についても学生が関心のある幅広い分野になるよう依頼してきた。堀前北海道知事や道内の市町村長、坂本 JR北海道会長、横山ラルズ社長、長沼きのとや社長など企業や組織のトップであるだけでなく豊かな人生経験のある方々、弁護士さんやモンブランで遭難した体験を持つ医師、プロジェクト X に登場するような技術者の方々、日本一の動物園といわれるようになった小菅旭山動物園長、クマ牧場やマリモの博物館の学芸員、学校教師や少年院の法務教官、NHKの森田美由紀さんも3年越しの依頼が実り、本年度講師として教壇に立っていただいた。また谷村志穂さん、加藤幸子さんなど作家の方々や三浦雄一郎さんなども多忙な中で講師として教壇に立っていただいた。これまでにおよそ70人の卒業生の方々に協力をいただいた。毎回の講義では質問の時間を20分間取り、学生からの質問に答えることを通して、大人数授業であっても一方通行にならないよう、学生との交流を図るようにしている。

講師によっては質問の時間の方が生き生きと話したり、本音で語ったりする。質問を多くするために質問した学生には評価点を出すとあらかじめ伝えてある。そのせいもあって質問の時間はいつも足りなくなる。

講義の最後にミニレポートを毎回提出するが、単なる感想ではなく、「講師への手紙」というテーマで講師の話から自分は何を受け止めたか、講師に聞いてみたいことなどを書かせている。実際講師の方々にはすべてレポートをコピーして送って読んで貰っている。

今年来ていただいた TOTO の猿渡さんは約50人にメールで一人一人の学生の疑問や意見にご自分の考えを送ってこられた。これは印刷して受講生に資料として配付した。「講師への手紙」は講師の方々にも好評である。中にはこれは「一生の宝」といつてくださる方もある。学生たちのレポート

には本当は講師にはお見せしたくないものもあるが、北海道大学を理解していただくためには、ひどいものも含めて見ていただく方がいいだろうということですので送っている。

将来の進路と大学での学び—受講生から見えてくること—

すべての講義の最後の時間は「私のライフプランと大学での学び」というテーマで学生による発表会を行っている。お正月休み中に上記のテーマのレポートをすべての学生に課し、そのなかから10～12人の学生に発表してもらうわけである。この発表会を設けた意図は、学生同士がもっと将来の進路や夢について語り合って欲しいということである。最近の友人づきあいではそういったことにはなかなか立ち入らないと言う話を聞いたからである。この発表会は学生にも好評で、中には講師の話も面白いがこの発表会が一番ためになったと答えている学生もいる。受講生による自主申告で発表者を決めていることもあり、発表するまでどんな内容か私たちにはわからない。もっと明確な目標を持ってがんばっているという発表が欲しいような気がするが、実際の発表は6～7割がまだ将来何をしたいかわからないという内容であったりする。しかし真剣に学友の話を聞いている講義風景はとても良いものである。

講義は当初は250人ぐらいであったが、現在は希望者が増えて500人規模で大講堂で行っている。実際の履修希望者は今年度には700人を超しており、受講制限を行っている。

なるべく学部の必修講義とぶつからないようにして、金曜日の3講時にしているが、医学部医学科、獣医学部、農学部、水産学部の学生はこの講義にぶつかって履修出来なくて、それ以外からはほぼ履修者がある。工学部と経済学部学生の履修が毎年相対的に多い。履修希望者にどのように履修機会を増やすか難しい問題である。

入学して半年たった学生たちは、自分将来や大学生活についてどんな風に考え、またこの講義をとおしてどのように考えたのか、講義の中で実施したアンケートと講義の最後に提出する「私のラ

「ライフプランと大学での学び」レポートをもとに述べてみよう。

受講生の声—進路に対する不安—

「私は将来への目標や就きたい職業についてまだ決めていない。考えてはいるのだが、まだ明確な結論は導き出せないでいる状況だ。このような状況は私が中学生の頃から続いていて、高校は自分の学力と照らし合わせて決め、理系へ進んだのも就職に有利であると考えての事である。実際のところ社会工学系への進学を決めた理由というの、自分の学力で進学可能な範囲内の比較的広い分野選択のできる学科を選んだ結果にすぎないのだ。(中略)思い返してみると『北大進学』というのが中学・高校時代の目標であった気がする。そしてその目標を無事達成した後は、何も将来へのライフプランを練ることができていない状態が続いていた。

そんな中で興味を持った講義が『大学と社会』であった。北大の卒業生で様々な分野において成功を取めている方々のお話を聞くことによって、何か将来の進路を決めるための手掛りを見つけ出せるのではないかと考え履修することにした。結果、将来について考えるには絶好の機会であったので履修して本当に良かったと思っているし、講演して下さった方々にはとても感謝している。

卒業生の方々のお話を聞いて率直に思ったことは、現在の私とさほど変わった大学生活を送ってはいなかった方が多いということである。つまり、大学に進学した時点で自分の明確なライフプランを見出せていた方は少なかったのだ。授業は単位重視であったと話していた方もいたので、非常に親近感を持てたことも度々あった。そのような方々のお話によると、進路が絞られている上で仕方なく就職していたり、アルバイトなどから就職への道が開けたりしていたそうだ。また、最初の仕事を辞めて再就職したという方もいた。このように就職のきっかけは様々である。ここから感じたことは、まず実際に就職してみる以外に自分に適した職業を見つけることはできないのではないかと。どのような職業であれその世界の中

で体験してみなければ本質というものは知ることはできないと思う。向いていないと思っていた職業でもやりがいを見つけられるかもしれないし、徐々に自分に馴染んでゆくかもしれない。たとえ向いていないと判断したとしても、本当に自分のやりたいことを社会の中から探し出し、再就職できれば良いと思っている。そしてそれまでに経験したことは決して無駄にはならないし、その後の人生においても必ず役に立つはずだ。まずは社会という広い世界に出て自分を知ることが必要であると思う。(後略)

上記の引用は、「大学と社会」の講義レポート「私のライフプランと大学での学び」のある学生の一節である。大学入学後半年経って、自分は何をしたいのか、本当に学びたいことは何なのか迷っている1年生は少なくない。

学部選択についての迷い

この講義では500人の受講学生に対して毎年進路意識や大学生活についてのアンケート調査を行っている。「将来のつきたい職業は決まっている」という問いに対して、「決まってる」「ほぼ決まっている」という学生は31%であった。また「現在在籍している学部で、このまま勉強を続けていきたいか」という問いに対しては、23%が学部もしくは大学を変えたいと答えている。前年度(29%)より若干はこの割合は低くなったが、それでもかなりの学生が、自分の学部選択に疑問を持っていることは重視するべきであろう。また「自分の選んだ専門で学びたいという意欲に変化があるか」という問いに対しては、プラス思考が40%であるのに対して、意欲が弱くなったという学生は20%であった。多くの学生は北大にはいることが目標であっても、大学に入ってから何をなすべきか、大学を卒業してからどんな進路を選択するのか高校段階ではほとんど考えてこない。進路について考えたり、相談にのったりという経験を高校生活では体験してこなかったのである。「進路について高校で先生にどのくらい相談したか」という問いについては、担任教員と「まったく」あるいは「ほ

とんど」相談しなかったという学生が60%、進路指導や教科担当の教員とは80%近くの学生が、相談した経験を持っていない。先に紹介した学生のレポートのように、「学力に見合った」選択をしてきた学生も少なくないし、「高校まではいろいろ将来にやりたいことを考えたりしてきたが、それはすぐに変わっていくし、実際にそのものに向かって何か行動を起こすということは全くしなかった。そのときはきっと大学生になったらやりたいことを決めて、勉強しているのだろうなと思っていた、しかし現実に大学生になっても、まだ何も決まっていなし、もちろん行動にも移せていない(後略)」というように、とにかく大学に入ることを優先し、「自分は何がしたいか」という課題を先送りしてきた学生が少なくない。そうした中で「本当は医学部に行きたかったが点数が足りなかったので経済学部にした」「法学部に行きたかったが数学の点数が良かったので、工学部にした」など、とにかく北大に入りたいが「学力に見合った学部」選択をしてきた結果、転部や他大学受験を考えている学生が、毎年23%~30%いることは、もっと1~2年次の教育で留意すべき事柄であろう。また

33%の学生が、「将来の進路や大学での学習についてもっと教職員に相談にのって欲しい」と希望していることも、オフィスアワーの充実等を含めて、もっと方策を考える必要があるように思われる。なぜならこうした将来への見通しのなさは、勉強への意欲の低下と結びつきがちだからである。「勉強の目標を持って毎日コツコツ努力している」学生は13%で、60%が当てはまらないとしている。「将来への見通しのなさ」→「学習意欲の低下」→「課題の先送り」→「一層の学習意欲の低下」と言うことにならないような、キャリア教育がもたらされる所以である。

ライフプラン発表会

「大学と社会」の授業は、講師の話だけでなく、最後にライフプランをレポートとして作成し、「私のライフプランと大学での学び発表会」とおして、学生たちは自分の進路と大学生活の在り方について考える大きな機会になっている。

「自分のライフプランを真剣に考えたことは今まで何度かあるが、私は幾度も悩んだと思う。しかし、まだはっきり見えてはこないこの問題がいつ解決

されるか不安でたまらない。だから私はこの講義を履修したかった。自分の進むべきみちを決めるために。(中略) そんな中<大学と社会>の講義を受けた。いろいろな講師の方々が、いろいろなことを話に来てくれた。さまざまな考え、境遇、経験、これほど参考になる話はなかったと思う。すべての方がいろんな形で問題を抱えていらっしやっただけでもすべての方が成功している。挫けずがんばろうとする心がある。そういう強さをもっている。これが成功するための重要な要素だと思った。そして<今からでも間に合う、いや今からがむしろ勝負だ!>と私は言われたように感じた。とても励まされているように思った。(後略)

「<大学と社会>にでてくる先輩方を見ると、非

常に生き生きしているように見えた。そして本気でその職業を面白いと感じているように見えた。そこで私は将来の仕事はやはりこういう風に本気でその仕事を愛することが出来るようなものでなくては、生きていて面白くない!と気づいた。」

学生たちは先輩の話をもっと受け止めている。しかし共通しているのはこの講義がきっかけとなって自分の将来について真剣に考えたり、友人同士話すきっかけとなっていることである。

ベネッセの調査(「学生満足度と大学教育の問題点」(2002年度))で、学生たちが選ぶ後輩に聴かせたい講義として、この講義が全国で紹介されたのもそんなところにあるかもしれない。

<成績評価・GPAをめぐって>

数学における成績評価

理学研究科教授 林 実樹 廣

成績評価について既に多くの記事がセンターニュースに掲載されているところであるが、数学の立場から一文を付け加えさせて頂きたい。

私が全学教育に関わることになったのは1987年からである。全学教育の数学基礎科目ではこの頃既に成績評価についての申し合わせがあった。これは学部・学科進級振り分けに際して成績が利用されることから、一定の公平性を保つための目安としての申し合わせで束縛力はなかった。成績評価に関してはこの後も何度か議論されたが数学の意見として集約することはなかった。

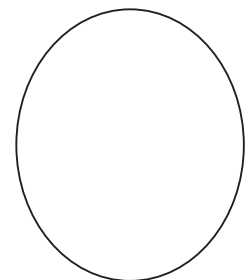
しかし、情報公開の流れのなかで成績評価の基準をシラバスに公開することになった際、数学教室内で改めて議論され、新たにまとめられたのは次の絶対評価の形である:

《評価の基準》

優: 大半の観点において高く評価でき、高い水準で目標を達成している。

良: いくつかの観点では良好に評価でき、目標のある程度達成している。

可: 学習成果が認められ、目標の一部を達成している。



この評価基準を決めるに当たっては、様々な観点から議論された。この評価基準は、公開により学生に無用な予断を与えたり、教育方法に不必要な制約を課すことがないようにと、かなり慎重な

表現になっている。

昨年度の講義からは、この評価基準に加えて各科目の成績分布も情報として公開されるようになった。これは相対評価についての基準を与える。今後は、上の絶対評価による基準に基づきつつも、クラス毎の成績分布も参考にすることで、成績分布のゆらぎが理に合った範囲におさまることが期待される。

一方で、教育は評価のためにある訳ではない。以下、この辺の事情を自分なりに整理して、成績評価についての問題点と数学の評価基準が上記の形にまとめられた理由について述べる。

成績評価は教育の目的ではない

もともと、成績評価は教育における主目的ではない。人は好奇心の強い生物である。好奇心を刺激する知識を集約し、それらを人(教師)を介して提供している場が大学であろう。これらの知識は今を生きるために利用するためだけではなく、新しい未来を拓くためにも使われる。

受験に特化された教育を受けたためか、教育を好奇心の満足のためではなく可能な限り避けたい苦役と思っているようだ。このためか生活に役に立たない学問は必要な人だけ学べばよいと考える人が増えている。しかし、未来において何が必要な知識となるかはその時になってみなければ分からない。10年後、20年後に時代の先端で活躍するためには、今役立つ実学に片寄るのではなく、応用発展の土台となる基礎的学問を修得しておくことが肝要である。特に言葉は理解するときにも、表現するときにも基礎となる。自然から経済、社会に現れる様々な現象の法則を理解・表現するとき基礎となる言葉が「数学」である。多くの基礎学問は必要になってから学ぶのでは効率が悪い。記憶力が優れ、頭も柔らかい若い内に最低限の基礎を広く学んでおく方がよい。

単位が取れないと勉強するだけ無駄と言う学生がいるが、勉強しただけ得をしたと考えて欲しいものである。また、単位と無関係に興味のある講義を聴講するのもよい。成績評価に固執する余り逆に教育を制約してしまつては本末転倒である。

こうした本末転倒だけは避けるようお願いしたい。

成績評価の目的

成績評価を行うならその目的に合わせて行うべきである。目的を追求する余り教育が後回しになることを恐れる。

大学は社会的存在である。授業料を取り、税金を使って運営されている以上、社会的な還元が求められる。卒業を認定するに当たって、一定の水準が定められている。卒業のために必要な単位数や履修科目などが条件として定められている。

我々が単に合否だけではなく、優良可の成績を付けているのは、学習に目標と動機付けを与えるための教育効果を期待してのことと思う。ここまでは成績評価と教育は良い意味で協調関係にある。

ところが、この成績が卒業・教育効果以外の目的に流用される。学科進級にともなう振り分け、各種奨学金の参考資料などである。この場合、人生を左右するので、一段と公平性や厳格さが求められることになる。個性を尊重するなら、本来、成績評価は多面的であるべきだ。評価を平均値で一次元化することは、他に適当な方法がないための止む得ない手段と割り切るべきである。

最近では、平均成績点(GPA: Grade Point Average)や日本技術者教育認定制度(JABEE)についても議論されていると聞かすが、教育を制約しない冷静な対応に期待する。

評価の公平性と精度

成績評価の公平性を極端に追求すると統一試験という方法に行き着く。これは確かに公平ではあるが、数学では第2次入学試験なみの労力を払わない限り、教育効果を歪めてしまう。たとえば、現在のセンター試験の数学は穴埋め問題のため公平性という点では完璧であるが、数学の能力を試す上では疑問がある。例えば、複数の答えが予想される問題で、解答欄が1つの場合を例に取る。本来は可能性を尽くして正解を得るべきである。しかし、空欄の形から解が限定できれば時間節約のためその手間を省くように指導(洗脳)される。現実の問題では解が複数あったり、解が無いこと

すらある。そうした可能性を吟味する習慣を改めて身につけるため、誤った洗脳を解くための再教育が必要になる。

成績にしる、入学試験にしる、点数化することで一次元的な比較が可能になるが、個人的には、この比較に人生を決めるだけの精度があるとは思えない。成績評価を能力の測定と考えるなら誤差だってあるはずだ。あの程度の誤差は予想の範囲と考える余裕が社会の合意として必要ではないか。塞翁が馬という言葉もある。幸運が不幸のきっかけになったり、不幸が人生の飛躍を与えることも多い。若い人には人生の選択に当たって幅を広くもって生きてほしい。

脇道にそれるが、入学試験も何割か定員を水増しして入学させ、水増し分は北大短期大学部2年卒とするか、他の大学に転校してもらうのはどうかと考えたことがある。大学全入で学習意欲のあるものだけが進学するようになると思うのだが。

絶対評価と相対評価

クラスの大きさが100名を越えるサイズなら相対評価で一定の基準が保てると思うが、全学教育の数学科目(微分積分, 線形代数)のクラスの多くは中規模の60名程度クラスが多い。また、系に

より必修, 選択の別もある。多くのクラスを教えたこれまでの経験からも、同じ系のクラスでも年度によって、成績に大きな偏りがあることも珍しくない。また、選択科目では、余り努力せずにあわよくば単位を得ようとする学生もおり、その扱いに悩まされる。

一方、絶対評価は「絶対」という言葉の響きから、相対評価よりも信頼性が高いようにも思えるが、評価する人(講師またはその集団)による絶対評価であって、人に依らない普遍的な絶対基準があると信じるのは楽天的過ぎるように思える。実際、中学校で導入された絶対評価において、大きな学校間格差が生じているという記事をインターネット(<http://www.kyo-sin.net/evaluation.htm>)で見つけた。絶対評価の問題というより、使われ方の問題であろう。

こうして整理してみると、最初に掲げた数学の成績評価基準は現時点で妥当なものとする。2005年度からは「秀」の評価も導入される予定と伺っている。これには大賛成である。

成績の評価は厳格・公平化のために改革を行うとしても、そのために教育を歪めてはならない。教育上の価値観、評価の多様性が残る形で進むことを希望する。

2006年度以降の教育課程と 「秀」評価及びGPA制度の実施について

12月17日(金)の教務委員会で、教育改革室から提案の、2006年度以降の教育課程と、「秀」評価及びGPA制度の実施についての報告が了承されました。

2つの報告書と、具体化に向けてその後の検討状況について、下記のホームページをご覧ください。

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/kyouikukatei.htm>

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/GPA/gpa.htm>

生涯学習 LIFELONG LEARNING

キャリア教育に関する特別講演会開催される

生涯学習計画研究部では、キャリアセンター等と共催でキャリア教育に関する特別講演会を去る1月14日に開催しました。

今回の特別講演会では、株式会社ダイヤモンド社「週刊ダイヤモンド」編集部の千野信浩氏を招き「社会が求める人材とキャリア教育」と題して講演をいただき、これをもとに活発な意見交換を行いました。

千野氏は、全国の国立大学法人をはじめとして私立大学や高校などを数多く取材され、また、週刊ダイヤモンドの特集記事「役に立つ大学」(本号巻頭言参照)の企画から執筆までを担当されてい

ます。

千野氏から、社会が求める人材とその育成方法について、特に大学が果たす役割についてお話をいただきました。また、これをもとに参加者とも積極的な意見交換を行いました。

この中で、論理構成能力、コミュニケーション能力が重要であり、国立大学は少人数教育の特徴を活かし、これらの能力の向上に努めるべきであるとの考えを示されました。また、参加者からは文系と理系の違いなどについての質問も出されました。

写真：講演をする千野信浩氏

入学者選抜 ADMISSION SYSTEMS

小畑力人氏講演会開催される

入学者選抜企画研究部は、去る2月4日に和歌山大学監事の小畑力人氏をお招きし、「国立大学入試の改革課題—私大の入試改革の経験と比較—」と題する講演会を開催しました。小畑氏は、「偏差値」の登場によって予備校の役割が大きく転換した時代に予備校に勤務され、その後立命館大学で、入試改革による「受験生10万人」の達成はじめ、エクステンションセンター、BKC（びわこ・くさつキャンパス）、立命館アジア太平洋大学の開設など、数々の改革を主導されました。昨年4月から和歌山大学の監事として国立大学の教育改革に取

り組まれています。

小畑氏のご自身が経験された豊富な事例の紹介とともに、国立大学の入試改革課題を分析されました。大学改革と連動した入試改革の策定、入試戦略ではなく学生受け入れ戦略の重要性を指摘され、また、国立大学に比べて教職員が少なく学生たちが多い私立大学が、いかに工夫して学生の「学び」と「成長」の教育システム・教育プログラムを創造しているかを強調されました。ご講演後は参加者との活発な質疑応答と情報交換が行なわれました。

写真：講演をする小畑力人氏

高校生の全学教育科目の聴講おわる

「高大連携科目に関する研究会」(入学者選抜企画研究部・生涯学習研究部)の今年度の研究活動の一環として実施した、高校生の全学教育科目の試行聴講が終了しました。札幌旭丘高等学校の2年生10名が、今年度第2学期に開講された複合科目4科目、一般教育演習3科目を聴講しました。聴講生は大学の授業の魅力を見出しとても熱心に学んでいました。高等学校の行事の都合(研修旅行、定期試験)で来学できなかった日を除き、出席率は73%から100%で、授業内で課されたミニレポートや宿題・レポートにも積極的に取り組んだ様子です。高校生の聴講に多大なご配慮をいただきました先生方に感謝いたします。

研究会では高校生の聴講の効果と課題を探るために、受講生、担当教員、在学生を対象とする三種類の調査を実施し、現在結果をまとめています。

今回高校生が聴講した全学教育科目は、内容および授業形態が多様であり、高大連携の効果は授業内容や形態によって異なる可能性が示唆されました。

高校生が聴講した7科目を受講中の本学学生は、高校生の聴講を好意的にうけとめていました。高校生が出席して「支障があった」と答えた学生は505人中4名で、自由記述の回答の9割以上が高校生の聴講を積極的に支持するものでした。「非常によいことだと思う」「もっといろいろな学校から参加を募る」という意見に加え「高校生の時に自分も参加してみたかった」「高校生がいることが刺激になる」という意見もありました。今回の試行は、高大連携を考えるうえで有用な実証的な資料を収集することができました。

センター日誌

CENTER EVENTS, December - January

12月

- 1日 ・(会議) センター教官会議, センター長連絡会
- 3日 ・(会議) AO入試委員会
・(会議) 入学者選抜委員会
・北大説明会 (札幌南高校)
- 4日 ・AO入試合格発表
- 8日 ・(会議) 第7回平成18年度以降の教育課程検討WG
・(会議) 第23回共通授業検討専門委員会
・(会議) 第32回生涯学習計画研究委員会
・(会議) 理系科目責任者会議
・(訪問) 網走南高校
- 9日～15日
・AO入試合格者入学手続き
- 10日 ・(会議) 第53回全学教育委員会
・(会議) 第15回教務委員会教育システム弾力化検討専門委員会
- 15日 ・(会議) 第3回生涯学習計画研究委員会公開講座実施部会
- 16日 ・(会議) 第6回教育改革室会議
・(会議) 第53回センター運営委員会
- 17日 ・(会議) 第34回教務委員会
・(会議) 入学者選抜企画研究委員会
- 19日 ・難関大学フェア (福岡)

- 21日 ・(会議) 第117回全学教育委員会小委員会
・(会議) ITを用いた広報戦略研究会 (情報教育館)
- 23日 ・難関大学フェア (大阪)
- 25日 ・難関大学フェア (東京)
- 27日 ・(会議) 第1回自然科学実験テーマ検討WG
・センターニュース第57号発行

1月

- 11日 ・(会議) 第2回自然科学実験テーマ検討WG
- 14日 ・(会議) センター教官会議
- 15日～16日
・大学入試センター試験
- 18日 ・(会議) 第118回全学教育委員会小委員会
・(会議) 第1回自然科学実験テーマ検討WG専門部会
- 24日 ・(会議) AO入試懇談会とAO入試の選抜形態に関する研究会の合同会議
・(会議) 第2回自然科学実験テーマ検討WG専門部会
・(会議) 第1回文系基礎科目検討WG
- 25日 ・(会議) 第7回教育改革室会議
- 27日 ・(会議) 生涯学習計画研究委員会 (臨時)

行事予定 SCHEDULE, April - August

| | 【日 (曜日)】 | 【行事】 | 【備考】 |
|----|--------------------|-----------------------|------|
| 4月 | 4 (月) ～ 7 (木) | 新入生定期健康診断 (予定) | |
| | 7 (木) | 新入生オリエンテーション及び学部ガイダンス | |
| | 8 (金) | 入学式 | |
| | 11 (月) | 学部ガイダンス | |
| | 12 (火) | 第1学期授業開始 | |
| | 20 (水) ～ 21 (木) | 1年次履修届受付 | |
| | 20 (水) ～ 21 (木) | 2年次以上履修届受付 | 当該学部 |
| | 21 (木) | 追加認定試験成績締切】 | |
| 5月 | | | |
| 6月 | 2 (木) | 開学記念日行事 | 休講 |
| | 2 (木) ～ 5 (日) | 大学祭 | 休講 |
| 7月 | 26 (火) ～ 27 (水) | | |
| | 及び8月1日 (月) | 補講日 | |
| 8月 | 1 (月) | 第1学期授業終了 | |
| | 2 (火) ～ 12 (金) | 定期試験 | |
| | 15 (月) ～ 17 (水) | 追試験 | |
| | 15 (月) ～ 9月30日 (金) | 夏期休業日 | |
| | 25 (木) 正午 | 定期試験及び追試験成績提出締切 | |

センターニュース 2005, No. 58 目次

| | |
|--|---------------------------------|
| 巻頭言……………徳田 昌生…………… 1 | キャリア教育に関する 特別講演会開催される……………12 |
| 北海道大学におけるインターンシップ…………… 3 | 小畑力人氏講演会開催される……………13 |
| 特別講義 「大学と社会」と1年生のキャリア形成…………… 5 | 高校生の全学教育科目の聴講おわる……………14 |
| 数学における成績評価…………… 9 | センター日誌……………15 |
| 平成18年度以降の教育課程と 「秀」評価及びGPA制度の実施について……………11 | 行事予定・目次・編集後記……………16 |

編集後記

「大学教育は社会に出てからは役立たない」と言われてきました。しかし、果たしてそうでしょうか？もしそうであるのなら、社会の第一線で働いている世代が共通して発する「大学時代にもっと勉強しておけばよかった」という言葉は理解できません。

本号は「キャリア教育」を特集しましたが、これまでの大学教育とは別に新たにキャリア教育を加えるということではありません。ましてや、わずか数年先の就職のノウハウを教えるというものでもありません。もっと長期的な人生そのものがキャリアのはずです。そして、大学教育そのものが各個人のキャリアとつながっているはずです。つまり、大学教育そのものがキャリア教育であるのです。(かめ)

センターニュース 第58号

(北海道大学高等教育機能開発総合センター広報誌)

発行日：2005年2月25日

発行元：北海道大学高等教育機能開発総合センター

〒060-0817 札幌市北区北17条西8丁目

電話 (011)716-2111・FAX (011)706-7854

編集委員：小笠原正明・西森敏之・◎細川敏幸・

町井輝久・安藤厚・山岸みどり・鈴木誠・

池田文人・亀野淳

ご意見、お問い合わせは◎印の編集委員まで

電話：(011)706-7514; FAX (011)706-7521

インターネット ホームページ：

<http://infomain.academic.hokudai.ac.jp/center>